湖月抄

夢のうきはし

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

夢の浮橋　一名法の師

河海　此物語のまき〳〵桐壺より夢の浮橋にいたるまで或詞の字をとりて名づけ或哥の心をとりて名をつけ侍るに此巻を夢の浮橋と號する事ハ詞にも見えず哥にもなし古来不審とせし夏の浮橋とつけられたるよりおもはれ夢のまくらの浮橋にとある哥につきていへる也大方此物語のおもむき全く色ごとにかけたる詞をかざりにかりて只無常迅速のことハりをあらはし盛者必衰の理をさとらしめん人がためなれや今の説相を業とするにも夢といふなり有無の諸法いづれも夢にあらずといふことなし涅槃経に八生死無常ハ猶如昨夢と説き大圓覚経曰始知衆生本来成佛生死涅槃猶如昨夢善男子如昨夢故當知生死及与涅槃無起無滅無来無去唯識論に未得真覚常處夢中故佛説解生死

長夜となり。因果の經書にも此義に付て、さまざまの義あり。さるほどに

いと多あるなと。香山居士の詞にも言下に忘言一時了。夢中説夢両重虚

となるも此なり。又浮橋といふは伊弉諾伊弉冊尊の天浮橋の上

にして共為夫婦しまひて、陰陽をさだめ、州國を生せ給ふより、

我國の始めとこれをなすとし、女のすくひより始まれり。彼漢家の

風をおもふに、俗を易る詩三百篇の中にも、関雎麟趾の徳より

鵲巣騶虞の徳にいたるまで、此夫婦の道をもて周公の風を

つくり。陰陽万物を生ずる故に、詩序に云、関雎は后妃の徳也。

風之始也。所以風化天下而正夫婦也。故用之郷人焉用之邦

國焉とみへたり。されば浮橋は生死の渡り煩悩の根元也。夢とは世

間出世の法皆如夢幻如夢也といふ空相の理也。是菩提也。煩悩即

菩提生死即涅槃の義、此名にあらはれたり。作者已證の分

をそなへたれば、かの諸經の説相にならひ序正流通の三段

あり。流通分にいたりては、題名をあらはして常途の義とす。今の

物語をも終巻を夢浮橋と号す。此巻の別名のことにあらざれども、一

部の惣名とすべし。されば光源氏物語といふべく、或人は浮橋物

語ともいふべき歟。且は物語を光源氏と名づけ、此巻の数を廿七帖

になさむとも、同職の所七帖の光をいひまうすかや。此巻

の名師説如此。御文以愚案加潤色也。但用三業之真實乃

義は夢の一字の外は別の心なし。浮橋は夢によそへて如来さ

る物之化南縁の義は種々やさしきをいひて云説とする故也。されば

寂寂の「世の中は夢のわたりのうきはしかうちわたしつゝ物

をこそおもへ」とよめるもうき橋に別の儀なし。定家卿の春の夜

の夢のうき橋とだえしての歌も此心なし。西行法師の事を

非するは此物語をつゞめていふがごとくなり。惣て寓言なり

一同なり。かの荘周は胡蝶の夢に死生の夢をあらはせり。是物

化の謂也且有大覚而後知此其大夢也といへり。漢家寓言を
百年の夢に化し和國の寓言を一期の夢によそへたるなり
なり。或河海中略記之　細　若九七巣手習の巻乃末又月遣
まどふなるべし。此巻ハその末の夜也。巻の名此外河海ニ
夢又也夢の字経文などにひかれ、別して八一巻の名無じ、名ハ
一部の名なるべし。一説此巻ハとりてハ手習の巻ハ一生さるかづ
ら夢のごとし。或ハ陸奥に下つて常陸にまどひ和歌のならひてよ
とまでさすらひたるも宇治までとてさまよひ我ともとめて見ひ
小野にいたるまで、とかく夢にてあらばといふなり。又一部の名
をとなれバ桐壺の巻より源氏の君の一生のうち幻の巻に
おさまり、薫大将の一生ハ此巻にをさまれり。盛者必衰の夢幻
を古今にあらはして見せ給ふなる夢の浮橋とつゞきたる詞
おさむるを総名にもちたる也。古来の当家の今案此抄絡之偏に

荘子の筆法にならひたるか又彼逍遥遊篇を逍遥とかな
く、往の字ハなし。又次の斉物論を物とのみいひて斉の字をも
はぶきていづれも名を略す。名付たる此夢の浮橋をも夢といへ
人あまた夢ハさめたるに見えぬさだめハ何ゆかし名あり。又橋の名も
ゆきかよふの上にも名になどあるにあらずや。見て名付給ふにや。さ
ら其源なる物也。此巻ハ天分斉物論を持く古くるや斉物
論ハ初にハ南郭子綦隠几・形如槁木ともいへりけれバよくゝ
胡蝶の夢にてそ出し、めぐりて此物語ハ手習の巻の末にいと
べく槁木なりのやうにかくて人に捨られてやとなさんと出て、此巻に
て昔のことひ出れどさらにわかるゝすもなくおもひしう
いたりける夢にうちのごと心もえとなりて出給ふ。胡蝶の夢
に同しとられたるを出さうに符合せしにや。玄旨のまにまなり
孟一名法の師「のかしと縁ある名をえらむべきそとハぬ出にかく

みよかりしく　細 葉中堂
へまゐりまゐりふ殿に行
まづさんまいの衣くに手
野堂に開斧の八月より八
衣さくときりぎをきせ
古へハ葉師仏によせな
るよりてあしたるさ
よりよ中堂に八時く
まうりまふとあり
一示のまのなんらの行く
孟俗教の行従うて流
本後まゐりも女一文乃
依抱のけれりにかゝ者に
そくくり

のそさうさ
いめいさうて
古 俗教のけ

やまよおりしまして例とさせ給やうよ給
仏るごくやうどさせ給ふまことの日へよりへよお
りされハ僧都どろへこりしこまりてめし給
ふどしてつまおいのりをどよつけりたくひ
給へれど申ま いとあへし況こはるゝり
まりをこのさひ一示文のなくちの相どれ
きこひまゐるよもしれまへ子かん抱し給ふ
申しとまそうりこてよるうしふうとひ給くく
今をうつうきらぎりくてへあそびされハとも
とりしうおきみすう厩のうくりでしとおもしうう
こくいりてさそでゆめし給ば依抱給るごくと海
やうおしろくおもみすれバなゆづけるどまいり

そのまへりに　細 在両小
野大原の山也比叡坂
本より入小野郷大
原の村也
こゝやうたかうところは
細君書にはさとく
あしき所として何世あ
とたえるれさうやうなう
しるなり
あかしよあかくしらさすく
うとも何とくねうらは
雅ありくしきすまう
をるし又山人あるくを
すませんとの御也
或中あるうまう本
孟僧都の母とてさうる也
又阿闍梨と云んと者んく
いとうきさうんうちもし
何り 抄 治定なくあらぬ
ちもれともとく

侍らしくてもの川きりぬらよとのくけうり　蓋の御く
よもりありるやどりや侍りとくひきへいる侍。　細僧都の庵也
いとことやうなりそこしろいよせんすまよりしが母
なりうちわまの侍るを京よおんうぐへもうさうて　〔朽尼を卑うるんて〕
こうとも侍らぬなうみよりてこうりうわおひて
八夜中暁よあかつきおとおひとつうちんとおきひまく
とうそ侍るとも侍そのようりはいうらし　細 蓋の御く身の...
侍のひしわうろすれてさてろりひまどく人地かうすと侍りうと。今は
所よさきの人も多くなりうるとくへりそうよてそろりゆくめれるとのあうく。　孟今は小
今もそうしらうかるよりてまひやうよやとう
のくとえくきするらめし侍うぞよずるよとえんよつけ　孟先より蓋
てはうるりりうしとよりし、らえ僧地かりよれぬ

あの山里よあるべきくへの
三 小野よ浮舟のあう
るを
うしろそてうきへ
性よそれと云うそてそ
籍見べうれども方さきは
いうぐときめひしやも
みとも
浅でにあうていひあう
孟 出家して受戒あるど
あくうとへまとくうと
蓋の籍あう
こうよこしるひなう
細 蓋のいとかなうそうり
人のいひうそうとあり
孟 こうとと八蓋のうしあ
ひとうやうよ浮舟の歎の
こうつとしいこことなくころ
なし
ほしとひひるなうう
孟 僧都の能身とりて
都余は尼なりしうと
よりかく

べうるよりうくどうとうれ侍れど。彼山里は
あるべきへのうくとうて侍やうよこうしをと。
うしうあるくとそへいうなう海あかくなとをと。
りうし中へめうとどおまうる明とよ浅でし
よありていむことなときえけまでがうりと
さて侍へ海こととうかうど年をとうくあやる　〔まめのさし〕
どきとあうりし人なれどこうよう〳〵いすひうう
やうよのうどくうあひとうるん侍るよなどの結
ふ僧都されそよしてべへとえしさうけし人の　〔僧都のんと出 僧都の浮舟のわりうる由ともひ合もるべく〕
さ海ぞうしづくまでの結いうろくもてへ地が
されざりけるへよてそわめれとものは流し
とひひるがくみりうくとうおらまうちう

いうへにてこんやうせひま
ことさら　抄 浄教の恐怖
まして世音のやうをさす
言葉をめぐらして

みろくわくびひくきんは
抄 後よろこえていうる是
ところりせひえて
抄 とかうハ暫く業を
めぐらして此ありのまゝ
抄 まやうくんとせひけるあり
おやしきせひまうる人の出
す　抄 浄舟の事を連て
不審しらうよりし

らうけ　河 老気 老病ニ
気労氣。細 不労の義
下疲 三 老氣也

とやうまうことくむ◯つゞれて、いうら色さ
こんやうせひまそうくらるよろこびくる
まこそあられぬらぬてまいらうぶひ
あるゝ浄らんはなくれあるべきことふとあ
浄。すらくわらびひくきむはあいうらん
しあづくだらりせひえて、いなるうらこと
よゝ浄もんとこの用ござらぬくまあやし
こせひまみろ人のはことのやとそびうここ
浄わまどものとかきま執浄そてまうで
くろまうころま字治の浄とのふ家まて
まりて浄けるよ。そくのあまのらうげよ
いうまとうりていうへ前ふづくしのとつげよ

おやのまゝあるとハ
抄 浄教の母の事、浄教の
妹の尼君のあつかひ給け
ることをいふなるべし

こまとの　細 花あるに又
子可能又宇治の事され
と大宇治親子の様まふ
しておせうのひよけるす
あ用ござることし　花 魏叡
え山僧ほとりて、後漢
書ニ呂大后の山陵をあり
て赤眉の賞集のおりしらう
ことと河海吾の諸播に
ひろりてにあらくぬ役
ゆう・ま后をときさ
まろ人のさらひと所
え・うん人の死せる
とおもそて入棺して大谷

人のやうでこゝろしらひまゝらむぞひさら
しよまい何めやしさこるすんとこゝめてぞ
世やのまゝかくるといまいしとさそてあくらう
ひるすけるそてらん浄し此人のもろくわかうのく
みふ海なりし。手すりよいことのうとひて掛く
しそれハ昔物語よ。し海底よ重ねりきれん
人のさらひと世あらく。さやうかりうとしかやこ
めづらしびら浄さく弟子めいつの中ま花んあら
まのごとをまびつうせつらくらうげらきさ
せなどるやんし浄れろ。なまうじいあしせんへさるよ
ひひすくねど、そくの縁乃そくうにめやまゝ
ひとりきことをまうけて。念仏とごろうござ

[illegible]応神[illegible]
[illegible]一条禅閤[illegible]

[illegible]天狗[illegible]天魔
[illegible]歎将[illegible]
三月[illegible]細[illegible]

[illegible]六三ヶ月[illegible]
人の[illegible]

[illegible]
[illegible]十月の山[illegible]姉[illegible]
[illegible]下山[illegible]

[illegible]禅[illegible]
[illegible]京[illegible]
三月[illegible]

[illegible]月日[illegible]
[illegible]
[illegible]一[illegible]

このめくりのく衆みだ
浮身の受戒とのぞ鐘一
ふ頌と浮教の業まうさ
まやまうくし

さしたるうめせんさ
孟業の山男近さ人と
いちく不知と浮教の
纲し　三業の小林細の
人とハこそ推量せんと
し

そそそあるれうわのそて
て　細　業のそし浮身なり
と浮空三まつり帥彼小
学ね物修よそり浮身を

よそそれぬらちあんまさこみのあしこりの
さ海らげをのがれて後世（のちの）をおもんるとられ
げよの浮しこしよの修しうバ法しみちくをそく
めきやつべきとしふらそそ海つより
（孟出家之）
をけをしめうそそまりて（て八助字之）しよ修がるしれ
おうめそべきとしばはいかぞかそうしにさこ
つま修らん然づしきとのさ海みもある
と世うさらふを表浮ぬべうらしうど味てあ
つきさまうしうくべきとしよきしてし
このかひ人ばもと者とうくとてい問ぢうを
とるくて修つうよ多んとやまへばさそてとして
あるまれと頂いさしてしうくませ此うひぞ

しそめりと出まてし
抄 内く浮身と推量して
まくうくまでも修教よい
但まうれしとされど一定と
住吏定めて八菱のらち
そうすく

くまでそ西べきことくハ
抄 業のまよりきさ事を修
敎よりつくむとるなり
この世よハあるき人と出追
やうよ　抄 出家しうち
人ハ男女のわりびわりだ
それハ業のさかハるさ人
と出すでやうなり
あしさうのまらうぎされ
あるんも　抄 業業の不感
まで物のけよ頼せしれ
うまくし浮教よ飢合さ
祠之藥師經よ業病
鬼病四大病あり業病ハ
前業と感ずる病之鬼
病ハ物のけ孤天狗など

ありしとらまれどはげよ多さ人と兵ひそ
あし人もさはまとしとよあらにこそてかりと出
をほど菱のわらしてあきましられバつて（細 家まそ抄て菱の字あり）
ともあへども深くまれ浮あると根修敎のハ
づしげうよりくまあらべき事べきとしうはよと
あ逸しきくこれおくりそおしまへでごうく送（細 修敎の之）
しまうらし後どの世まハるさ人と出すで字（業の因業とあるしとぞあるこ）
よ多しうことは世あやまちまうしらし
てつきふうかれバあしとものまらうぎされ
浮らんもさかへきさ紀の世乃葉なりますは
うさき家のことよしこそものし浮らうあいうるあ（抄 浮身のそをとそ）
やまらふうくまでぞるれ浮らんよりこと

に説せられたし四大病ハ
地水火風よりおこりさ
る風寒暑湿まどとき
病ハ病と云浮身も悪
病にて又業病なる
べし
みやうくまでゆちあつ
ひとつ　憐とまで身を経
りハわくねど又なう
に流浪させんとも出
へぶうしとも

ひや猶へば有徴わんとくあらむといふへとなす　細　盂生王家上無等倫　日本紀　王之子孫之
ぢまやありれん。ちとみもりとつわざとお　盂　葉の秋身をよせての類
ひしことみも侍らぞりのところてころ
げそめくハ侍しうじやうさいとりくまでれ
ちおぶんべきくいとは出ひしまへぶりしと。
めづらまめともなくこえんうせみしらば。
身をなげさるみやなど。海ぐようとうび
出おもて。たらしるるこらへえそて侍しぞり　細　出家の云こと
つるまあん。つきうろめて物をなされバいとよ
とんやをもなんまへつくハ出すへなりわると。
もうなるへなすんいろくこひのみしまなる　浮身の云こ
とうしなん時出さうとつげましきまし

月ごろくさせなるやうに
おの小野の花の人はうつせ
しとひしあとこによぶ
へしとく葉の身さらし
うすしひよくでよふらひ
ぬし　三　出る身を経る
ハ母の小野へしぶゆくゆゆん
とくし
のさうりしよありまへ
盂　葉の僧都よつれてゆ
きまふとく

くひげとそのうる法
しじゐよ
とおもうて　盂　都りて家に
教観のんてうせぬるすゞ
ませて女ハど僧都の思ふ
し

くはれどつきざりしさま侍りろ得いなれ
やうよ物をえりしらや侍らん。おやこの中乃お
ひとくぞくうすひよくで　細　声　とよてひ物しるよ
ぐし侍るんりしなどのあそ　抄　僧都よ似合ぬ志るべれ　まそいでもお会すさ
ぢも小野へお荘とく
まうへうは出かすとしゝのさうりしにありまへ
うぢうさうてなのせよ出ひとくもとべられそ
急しぶうしへかわら。葉のやうおかうてく　細　葉の字二
もと今まであつめりもんとなんおひあよ
なもの給わる点いて表しお出まくれだからし　盂　僧都の葉の名さとさ　細　僧都のこと
とくへ世をそむさまこうし出がくされど。なく
ひげをそりる法しじまよ。あや　三　嬢欲のこと　しるさんいう
をぬきわりませて女の取君とふりの

いしかりつゝえぬべき
出家のみちにいりなく
つとむるべき事をせよと
月をうちての所よほせら
そこ　出家月よし危険
俗界の事内をとりゝ也

その法せらるゝ　細　身要の
意よりうらん歳の
つれどもさんとうび
人のうり　孟　俗縁の身を
叢のかしをせられて
世をひとゝしるすまへ
三　俗縁の文をよめ人小理
への事よばせんとし

いかでかはしりうつとえぬべきわざま
孟　叢の孫まのまつさての思惟く
とおぼえさぶらへども、あながちに心をこらしてぬま
細　俗縁の障碍と
うりむりむじりしくあさきさうり給ふ月ごろ
俗縁故障をはなれて出離をとゝうえん也
ての理よ法をしそこしてゆゝせ給はんとすもし
叢んし
給ふ、いとゞしうもりしかれど、さるをもくとうら
つけまうされんもさ個わしくなればさしばと
てうり給ふのをうしれたち、はなにとをおもて
おりしうきりうにしていつるしつをとりかへさ
叢の句也
ちとをしげるとびけ出給てこれるんその
人にまとのはなれいつかは入るもし
人のちうこゆうり事をとられしそう我くはちん
叢とはみなくとし
陰とひとぐちうまへ人、その人といふて、さて
おもさまうへなんあのしげりのうらうと

九

なむかしこの事をへして
出家はうの事をせバ彼我
まゐらんとし
このあゐ海にて
くろいてつ　出　あのす
いわりあうに初めり
そしらハ叢のゑづまふ
りしてもうくも事足
もし

一説えり人を事入べて
其智恵を落薩せしめ
人をもとゝそしはらまふ
そむうしるのんと

このましけるこみ一川と
三　叢の我身のまとの
まつるり

細　出家をうつ人
孟　俗縁の思惟と
あらせよ事へよのまへ、いなりけるこの事えいりて
そんじゝ事へ（事へなり）
なみにてそえ給ひるん、この事にて海はそ
しくもらわつゆくずれとしつくしくう
細　叢に
ようとまてあるべうりととハ海をさせ給を
人はよろゝのとがく給ひんとあるべからう
ひくつとえあべき事ぞとめりハよし給ひん
孟　俗形ハ
ことそ川しうれてある法ぞくのうちよ
細　女三宮
て今すぐとそうちんいとおやしき、いなけ
叢出家の事をあらしと
あうしうらへらちざしうく俗世三条
之孟女三宮……世ハ出家せぬと
の家乃うちうおぞげふくらのりしげうさき
身をひき川をよ今ずよ覚ししうつさうぞうれ
ほうしよ世をて給そうぞりひ給つるおどよなあ

うゐるなごりの 哢 宮詞
物ゆかしうて夜な心の有無
いづしにかくかげさ
侍従詞勝也
みえたまひてのこるひ
て 孟今上の女二宮御宮
事の宮よ内の御御詞よ
て薫大将とはこのこと
詞
薫はやけなさうてにのがれ
がたき事なりけれどそ
まも侍るめ
今夜難去事なしてぞ
出家のたまふことをとげ
ねらし母君のことを
ても心まうるいでゝく
なりしてさいあがるよ
侍従の詞をうけてきま
侍らめとぞ

づゝしろあるかぞもふことよくたち君の
ときてもゝ心ようりびうるかぞして心はなぐ
すぎ侍ふはみえさりぬこともとどのことそひ
つそくさびゆかやけとさうてこのがれぞ紀
ことよつけてこそさとをくてあさうでは紀
のさいし侍りこのことどもなづりまもろしまよ
がんとしいゝりくあやふうしくしてそん
のかはひまうりよとと侍りしぬうのとまし
侍従の女房と落とん女ハものいもうるとえ
ていしとちうきことようひてゝもとちきつを
そへきこしいなそてうさひまへんさうくよお宮
ちぎさとよ侍らさうひゆかをまづさゝいて 孟浮舟
の母の事
かしさゆやのさうひるしとさりてあさうらめ侍らん

られよつけてなめかし
師はみを宮よ御内よつけ
て薫の君いまう文一段
いまよ附属まで文をよ
物文つゝうしまへとし
まくあらやうらよハ
細 浮舟をとも宮井より
ぜし給まつぞて縁ぶ
ことし

づりらんぐれしうんやすらへざるじ昔ら
道心のうく
かく思しこの心とうそくうり侍従侍従をとげ
だんとイ
みとられづうそいしとうとこしとあぞとさ
孟薫の小野のかた
こし侍従よ目もとられぬきゝいゞ中やうりとい
御物未定の事なりと
とりまめ人なれどうけのそふりそまの
しうんこそ御びんなりまゐれときまづ
浮の身也
らひそうりあまばえきうとのよしくをと侍従
薫の詞
めとくめうく調めあふれよつけてつ調調の
細 侍従の文也
へるより
めりしまへしぞてしまへいぶふをそるてそゝを給
侍従の小君よ御也
時くいよ山よかりてあそびまへよさうじゐうる
小君うらし 孟子細どいはざれどもし
やくるハゆかりとかずに御ゆへもまそうとさう
しうらひ侍従このといふ心もえてゝどと文とうりく

あとゝへの山 細 危所にあるを
おろかならぬへし 眠 若
挟 迫にまかり但これは
ゐ所になりとむとて夜乃
山みゆらし 細 茗よあるう
茗の新ぞ
てみゆしう歌なとあり
孟 ゑらの後あれとも器
よむらひいうち新しき
のところ(?)ひとり
おれ明のあさかてゝ給さ
さまかうあいとする称し
ひゝさかし 細 海まかるや
花 ゑりとひとのとも
こゝ四陽してひとさかし
まのあさくとも

月日のすきゆくまゝは
師 月日へて志れめへ
こと源寿ゝ所ひり
のさひおもとき
の厭ふこのまことやそうら
らんと 抄 薫のいひ人ゝま
するかちせうとの嘆と

ほとをよりかすれハ いさんの人〳〵もをさ（抄 西坂中こ）
うしろうしろく よひやうをとるゝの後 小（孟 源にゝ数ゝあり）（薫のへ）
料もいとなくもとかうから是聚の山よむう（あとゝへ）
ひく〳〵もうしことらす やつゝこのめ降ふる（御の名）
かりと若笑めりなくさめもそておくるよ（若菜八宮源と…）
さいのとうりまこひゝら 岩の新掘しうさの（山よ警蹕せしや）（のさだ）（たまゝ）（薫の下）
くゝしよをひく いへ生ゆうとをしきう中人の（炷守へし）
始とゝをしなひくもとらしとて 尾花しうゝも
うしに出るすかゝるおかげしまゝすまうあしん（細 尾花の句也）
蕭ゝをいとかくこそこめれひゝあるさよ（ぞ）（御秋の名え）（薫とこのへし）
さ限しこそまつれをかう[illegible]ひ
りまそてはあをのくしよへうよするとひとしま

さかりとこそありつれ 大和哉とハこの女二の（細 源）
夕の浩地とそまやかりつくるをいふもいとと
身の名え 孟 薫とゝるよ宇田をめさうちと源氏の
とめ世しとちくゐ中ひよらや生まくに
やあらん晴ゝくらう山路かけおいそし晴つと志（孟 源氏の）
火をろてそひまかかそ（孟 うらへかうれおかせゝゝ）
おうりしとひてんのへ是もうらうけまを
かそてすみ 月日のすきもまくに 昔のかたら
くれりひ言ぬもいまはうかくとそくさこそ（ことかれ）（かうよ御家の後ハ…）
ぞくゐうなれハあやしき仏よらひそうてう（細 宮の…）
りくいとく物もいひそてみゆうり横川より（孟 横川ハ…）
ふへのとまんこのまうりまはくちうさるに（薫之）（後舟の牙と…）
里ありけるのとれる このみことやかてや
らんとぞりくれども ひとをゑんかりそでびん

やうんしかおりけれど法
華の人にもいろ〳〵かわりんとゐ
ひとざまりありて。むず書き
かりし
むりしもつねよつるせし
物やうなくつらかせしまし
あるまゑりけり
うせあしいりうと
細浮舟のこしえあるゑれ
どかとざいりうとくい
つるく所自智気の身
は忠へしくしたり
いろくらをよいそ捨し
孟浮舟の出世と小君
は薫のこと
ちくあはちうしきにいふ
あ　お浮舟の母はよくもて
ぜうしばどしろきさいは
さそてまひろくあらんと
意は薫の口とさめて

あられば庭よくりあて。やさきの日ことさら
すぞいぶしきそ猶。むろあしくおがりそへの。
こしけるぬ二三人ばかりをとらりつゝ
むりしをつねよつらくし浮舟さん人さりつゝ　細常
陸の守のこと　さりぬまよびしきまて。薫の御文まゐえ　あとびらをかし
いりけよのうれ世母ゆやいまは世まおよ
さん人とわりひさそみつとゐいしくるよこ
そりのし猶かれかしきさん人せはさうそし
とみ残いつきそ君よそくまはまうし誂よ　これまおあらのまさいんとも
いかおゆりくおどうきさはげん相どりよまう
ましさん人をよりらんぞめおやの情おりひの
けしありよそそくしもうけめれとやさ

そうとあらしるよ　孟をく
は唯といらつる意となく
時むせらつるをねやすで
捨をいふ時のことあり
所なくをまきまくらつまん
とそあくりまいふく
ろりておそし狩そまん
同臆お薫ぜしぬ
へし所法師の人と出
家せしむりけりは功徳のまる
也公臆まくさくものありけれ
あくれども。是は御年よ
御りなりそくりてもお

さうなりとくらうくあめまと。わさるさんらち　小君かくて
みるいひいくしはかかれどこの君にくちら　浮舟をさ
とばかりて捨ずしとおひあらくそりしれば
を猶よそりとゆそし。いとらすとおひさまさ
おまさくのまへぞ。いとられしき子も殿の君ら
おなどぞうしとおひてまさきうりしるよ。なと
とあらくるよ常にぬさりがここは地はまざ　小地之
三僧都より翌朝よく彼のまいる事也　つとめて。僧都の法もとく里へは右殿の　お文の御と
法使ふくごゑやまうてまへりし。すその　子細をつけ
あらく迷惑せしこと　うろうけ猶りりしよおどろきさりくうり
てあらし狩そあんと。姫君よをくてまへらず　浮舟をさし
うしむのくさんべきてとも御わりれどやかあせ

くせしとし
をふゐとゐてちかふ
へし　御薫もをふ
めすらし思ひなるとおもひ
ゐらるべし尼公への文
をうく
思ぐしゐかりと
御尼君に此事ども
かうゐく

そぐしてさふらふべしとりさたまうられハ、お
よどしそでし。おまえ思ひどもさてしたまへ
てまうりてことをなすりあへたてゆりそうらふ
かうそ物のゆゑしあらぬやしとらるしう。物ぐ
しきのけりしうしみられんと思ひつゞくるに
いんくさるゆくてねまくる　よる人ぞ絵ハせ
よらうちく思ひてつうしくいうさしくう
らそでこゝのふをさへる。心ハおほしてさきさま
でゝひゐうら須じるる。山よりそう河の流をう
そこみうまうりうろ人るんあると云ひれ
よらあやしうれども、これてそさはいう
るゝれをうしそてるすしりとそしてうすてふとい

孟尼公のゝく
浮舟の方へとも
孟浮舟之
孟尼君見りくしう
小君の来りしあと内て
尼君のゝく
孟薫の文うゝんとも

あらくハさうしうつゝ手
くつそ　孟浮舟の小君
ゆゑ隔心あるまじき
と浮舟のしまひしう
御さ自よあへしらひ給
みうと小君の詞也
人々の娘君御浮舟をとふ
浮舟の文のあて所と
あうじみどあらずがみべき
やうしもなし
孟浮舟の文よ浮舟の
あきがかくあれべきや
うよあらじとも浮舟
のゆかれぬとし

そせられバ、いとうけるあらわゆるうる
らしのえるすしんさうぞうとうぞお兄を
まうら。みしうごさうし出てうれバ、ほどうれのを
とまつりるて。かうさうくみそふうて娘まで
くてそ八僧都ハの給しりと云ひて。おまで君
ぞいうへみどうし給ふことりうれてうれバ人
ざう人の娘君めれりとよ。山よりとて君りさこあへ
まおゝどあひおゞゐべきやうもあらぬいでえ
しくなく思ひて、いよくおくのうきよ引い
られて人よりひとそわうをそ給りそつゐさ
ぬらりそうしひりのし給へりしあれどい
とうそてふうしるどいひて。僧都の流ゆき

浮舟の身のうちあへ
河海是白氏文集
細条陸之
細此わうハの詞也
浮舟之
浮舟之
細僧都の文なと
あらう
君の詞也
尼

げさうに文侍りの
抄 浮舟の文ハ昨日横川よ
て去て 童にもたせ文
ありさんべけさとそう
そりてハ仏のせめをうべき
ところを 師 御ふみ
手にとり後悔あれども
仏のをしへまもそむ
くべしとて 三 善の執心
をとめくる情なく背き
たるそうくぞりぐ文を
て彩とあるんとるり
一 目のまけのふとく
は心地 観経曰若善
男子善女人発阿耨
多羅三藐三菩提心
一日一夜出家修道二
百万劫不堕悪趣
折ふの年せうく
御著しつしのびしく替りり

みなそげさ宮に大将殿の御かしこありてれあ
ありそ御らうのよく侍れぬをめりありさうし
やうくしくきへて侍ねはんかしかゝり
けり世中をそむきそておやしくさやまが
つのあるよりすけしのゝることありては都に
けのきみへきこしありやうんぐけさ御
そらみびろうさ侍りしもん御ものはらござ
まあやまち侍りぐあいきうのつくる侍る
らせよをり
しぬしまて一日のすけのくくぐいちかり
おさきりのあれハ後世のまをまへともんる
こゝにはらげりうさふてひて中侍んめ
ぐ川との小君をもて侍くむまゐらり。

まふれてうび出家の功徳はむなしく
しくべりりく料世をえとこそ
こともへて 細 妻くへこと
のくをまつしさら人ハ志
弥まじりさなから 孟浮舟
そよく知らずて

このよハ今にて世をそひ
うらしみぐれみまにて忘
しくそひし
浮舟のきよ例そてこれ
そひ知ぬうくられ見
みくやうるもまつしと
あらし首尾あるも

まかめくくもあらしく候らさあらしく代とみの〱
進じとくへいれめくらむ。この君を抛りりう
おそろしらん我にてふうし今こそくあるり
ちるへるべき世絡とをひられてまそうし
しぐ御よむをてこ侍へはどのまハ今にて
世をそひ女るきし多くられたるもにてひしく
そひしくなる物やうよりをのしをそろまそこう
人しどハいてさうにすくあやふくなをとらりて
みくるしうとも母のいとをれしからぐくつら
かも時しめておそれもしくハはずらうしゆうとも
けしかもよくこゝよ情まくろうありかくハん
をそひハ知らふらを実のやうかもしゝ川母ろ

こゝろへこのこゝろハ
三 薫君のすみかハとその
やうよ人のみぞこゝろく

あらさ御ひしとえまほしくこゝろへどのこゝろ
いとのつりやうしくさけど此やの此きすさえん
やうえ御のうみもえこうびりしともくされ
どころまびとくれしくて御ちくいきうれぬ。
尾君のかへ
いとおうしげかくすゝしら此がし給へ字
細うき小ねよ彼より
孟 尾君の詞 浮舟よ小君の仰すふハ兄弟なりとし
からもとれバなくらうよてぞおこう子すめ
れどこゝてま母しく此御そこゝもあへんくら
細うきかなののこと
よられさそしま川らんとらふを何ら世ま
小君らく
あらりのことも此えさうんよおかやしきさ御
尾よるうき見て
師 よおかの御し
よ此もどりてきてかたとえしんもなるけりしと
此りへでしよどうらうらあしひを卽けさへぞえ南

物きといはれてるん
三 御心と此かれん
ましし出まりしあぞそんなくらうしきさまよりのことし

うしま物もいはれぬよし
わさきかしらうえんありきよ御
ハ お物よくれし何のまゝ
それよりおんもうせうる
まや、さふしうこのまゝを
者えられうるよし

そのうちとよき御うらぎ御に
物 絶待君の物語など守り
みしてもひ出んとすれど
れをひ出れがたく
いそうしてそうるうを
母浮舟をいひてうるう
きさ為よくなるそうる
ちぎてもひまひしるよし

宇治までの浮舟の無程うらしるよし
いはれでるん。わさまりらげんありさ御とし
めづらしるうことゝをまそげんとさえてころ
しんもうせむしおるどいふんりのともある
ぬさ御よなりよけりやあさん。いふものく
すぎみしうさのしこゝも我るずしさうにえも
師 尾の縁の事をしよ侍るの声をまねるしと
ひ出ぬよ。ここのうこともあつらしへの世何物が
宇治のことと絶待君の物語なり
そうすありし中よるん。ここしあうりのくと
此もとし
やと母の御まりひ出しるくとあれこて
ちとしそのうちとと御うらぎ御よ此まりひ
づられどさうしにうくしくとも此がしぬ
於浮舟の母の事なし
よしうびひとり物し給しへのいぞうしを
うらずしぞもひさありし繪きずや世てま

おんすゝんで、それだにうらみんゝはなけれ
ども、ればしさあふく袖のよ。なふされば氏王
らしのうかゞひたくてふしつらね手すがま
をいとしのびかさせれど、いまさらにうる人（細 小春之）
かもおりとはおもへれどやさしかんと飢人ぞひ
袖の。めのひとりしまよものし結くれど。それひ（細 母のこと）
とらまうんさいめんを待ち用ひてもひなぐる。
このそう川ぎんのて西へる人などみはなそう（細 善之）
よあんと思うれなき心じとして思ひ待れ。
うまへてひぐしと力う由りと思ひ出して。
まくろうま入とのまへに。いとうさいとうれ。（細 尾上の胸し）
そう川の流れて、到ずさしりみなりゐもと。

ひうくきなりるりく
三浦弁はハおうねそう
はなやらしきくしん

あめよりろくしき楽
ともへも
三善のすゝなむぞ人
なぐへつふやうみくを
ろへおわしどと出る思ひ
ひをなり
まやのきつよおもくそく
りやのきつよ九すをつまそ
くひきしのみその心う
小春ぞ入らぬ大坂月簑
氏子もさはつくれし
細さハ出つれと出役下
留主し一役さいざきまつれ
とくし　孟　驗ハ吴役し
なくや　佛母らうゝらう
おしろかり　河　鷺　破
お童とかむかさゆく
法文あらんまへき人ハ
三浦弁のすこしま袋
をと内よりて入さなく。

あかりそ堕すくまのしまへぐ。涙ききよのこひ（うぐく善まようう）
まひりんもと
てくしさるしすなひさんやい嫁よろしれあらし。
ちのめよりろでしきされ涙とかをおそし涙
さずるど。いひさはざそ。世はおもしぞそうろ
つうくおかつしまもくしぞくしされいひのはせ
くりやのくさはま木丁ぞそうれとうら氏子も（小春の心）
さはぐうつれど出すれまれだかでつひらうう（浮弁おやまとハ出つれとくし）
んもつましそれどしまさ結れ文いそぞくそ西（小春の胸し　孟　善の文き）
つくんそう川の流れおもへど。小はふしうるゝはせ（お抱子どものかうつハなる思し）
くかなつるく袖をそへとらつやそのいへば（孟　実因みれき）
そくやおやるら川らしるどいひらくれふそれらん（尾上の胸し）
むぐきく人へらうなまのきさせ結めうけそう（細　見世の）

けさうの人かんいうなる家。
るす　抄　かくらの人く
御後さえさ侍従とそ也
女従のこまうせよ
抄　差ハ何ぞうるそうす
のふとのこま人と小君ま
いひなり
かいれ君う人へまうのを
美うやうの薫をまとさ
此段とわらハやうあかう
なりじしくし

しく人めはぬならまれ　抄　本ナどうされと浮
舟のけそうひまうさまし

の人く　花日　そハおかうの人なく
の人かんいくなうこそよりてこうろうんとく
侍らむ　細　尼君のこと　女従の御んをとよめさうまさ御ほど
かれどうられ君う人よしうのここうて給ゆう
とあらんなど　細　薫の御こと　孟　小君の御こと　いへど娘がへうそぐぶがくとうく
まくなきを給まハ何ぞるよなきこて侍らん
うとく美しなりよかれバ御の御へきことを侍
らぞ。しごこのれうそとく。くつくなるくでしまま
れとそ侍りつるいうぐ侍らんとひへバ。いふしく　尼君の御こと
小君を相きいひて浮舟をいそぎ給ふ
かりなら程いとうしくうそてみおかりをそです
よむくつけされらまこそよいかしうとりし
てまてのおまよどしをき給ふ　浮舟をそ
浮舟の御こと　これバへあれ
みとあらでおまへるけうひしく人めはりぬ

童のなくし

かくとしくしきとあら
しこうひていそぐ
孟　小君を浮舟のこゝうく
しくあへらひまよめが。
みうそ君しとかそくし

例のうらみぬまで
抄　御の香といおまりて
まぞうとイしきとよお
ぬとどうり
まあくぞまてをともこ伝かと
抄　白氏文集の密通の子の母
どもうめて入たのゐのあとど
まあくまさう侍れよさへ申
しけハ大燃之愛著などを
人の着まうかかるあり歓
音大士るじ色と出家せる
をここりらくし
細　まれなりくりかくらし給
ひかうわまえへまかくし。

うくらまれへ　浮舟のおさまりさとなをそらへく　とりまよ。ありて　こそまり
小君詞
てまう指ろくりとくこ御かりですうらんと。
くくしらし給ふらしとひていそぐ。
あまた君給もとひさとをそとをまくつ。
浮舟の君くまの給ふことし
ありしくみがくのれまそうその事なこと
例のまうのぞまくあくこう給のかまこそ。
細　差子地也　あ　お将ありたと思人のそるまえ
例のまれめそのさくしすべきく人〳〵ときあるぐさ
くかうしとさくべしぶうらまれめく人のまさなく
細　かうつの文の御こと
さあ御くまつきとめきされこうるそまぐはがうり
まとりは　ようよりきら世のくとまさう只
よ給ひゆるしうこして。いまはいうそであさ
細　萎日
うくらまさとく
ゆうしるち世のゆ給べがうり。そるまことつて
細　ころくや親之
ぐうくんのまれうかくなりどしたまるん金ハ

ぼうしてんのうは弘ちう
んとし
のかたしと　細　法の師
まのもとにて信教とば
けむつくさまふくせうひ
けざうるすみさ几を
うとしお文字との
宮かうしく悲しう
さなり　三　かもとあ山
いらのて心ひとうりね色
くつぶくし
法ざさまうさすまへるん
まり

しそ人めハいりまとうさもやまと法らうと
叢のり
法の志し易めかなをとさうへまてせうとハ
ぬ山よりてまよふられこの人ハころやうまゝれ
小法のうち叢の文の細え
給ぬしんらてよてゆく思うすされうることに
法弁のくくさかまく
こうくのみくちんおしいとこまやうかう。
法弁の心え
りつかくしくさりあへおさ海のまうさてう
いさんしさあさまさうしそその人おさもあ
むつの法、尼かきのうれ
尼まるらまるさ
らぬさま銭せうひのかうまさうけられさ
こしうん限どのたうしこるさおじと悲ひこ
ざれていうそうとしぬかくいひやう
へさうまりさすまうるるそてひれふ
細　尼君の心え
しまへ生じいちしょ阿りぬれありてあらんし

よこし主だけまりてや
孟云ハそうまうそへいい
くまうと悲ひえん
とく

つとさにとどころなうあやし
それつまハとくがくしうとの

細尼君の心え
こりとうひぬべくうちえんおしとあうれ
お浮舟の心え
てらうのうさとするやうかし信仰じとあ
らひそいまえてしえんせりしのこしせうひ
づれどきりよせかゆるこしすくおやしく
細　夢五
いかうりつるとあまもうしのとふりえじ　あん
まてしをいけきりてやぶれかてあるとうし
らうてこともあらんかふハるをりうさい
てまひぬぎころさくへみもあらんよいとかう
お文を尼の方へやること
ちうていうんしそひうけあうくわままい
お笠ハ浮舟尼君の細え
こよさしやてまあれべいとえんうし流さしつ
あなまりなしうしぬさえてそまんかひて
とつとさりどてうかうんべしあていひさ

ぐれんくとあること河海の
流めあとしかがんへ行り
んかしきはかずもの
三 葉の皃まらざひまよ
なし
四 わかトうらうらそへなる
やませ　三 浮舟の哥
なり

たぐと。浮舟のこと しうしそてしらくまらく鳴ゆれば
細 尾云し　孟 尾云し　それもひきかれくみしまうぶあかしぞこ
孟 尾云　の小君ま稲荷しるかて　のとことよりめぐりすうらうしそてよの
の小君よ従身小羽と　けれかくめんすらん。側のうち海よこうく絡
浮舟のこと　三 出家のさすく　ありるくたすやとをもうらあそてれりすうつ木
尾まうり未だし　こしまるうまへるど。らづひろて絡へあ
らへいとまづくうらへさ流しくいこうそ
書のごく殊まよ人角のこのそし　まつりるげさ佑しも志うくいどあそ
越まふかふうしされこといよの佑けうとい
ときれ角をまへし　まろんいとゝさぞけあくやひ佑ぐ田ぞろ
もらもあうしらそへあゆやまなを絡あるさいて
どうりつと代よ如何しくうろしやつるひ

わすうかぐ忘うされど
孟 おかし八卿食慈えを
てあしまへて小君のう
けへるなし
そく枯うつなとき
三 尾云の調浮舟のさ海
どあうのまうくまやまへとく
雲のつうすよ　細 引云来
動ありぬんて横河と雲
の八宜えらむとくよれ
と此雨くあのへさまそて
わくらかぐう雨なあれん
風らけしくしとそも

里と物思て さき絡ちぬさ海すそるんと
さうし色。雨よつけておりしさあうしえかど志
られど。おさあうちへぞことらへしおうく
孟 小君詞之趣き二さ世まま　わそそしうちらして。ひうしぬれさせ
まず一言の物を云あれりしらし　升 浮舟よりむる久れて　まつるまらしまおるまでしくとうへ出しさせん
細 童の云　ときすんうく一こしとの絡うそようりなる
尾云の詞し　とらへばげよみでしひくうくるんとうらし
白河とうりてりうき　浮舟のさあ之　りくられども。物をのつ海ちるひいひあくて。
尾云の詞と物をうけま八とし　うちうくぬかわつあるさき物のさ絡とそうて
栄 やまかつく付　うせ絡べきるあり。雲の付うのそへそうら
ぬ絡みも佑めりをさ山風ゆくとゑじゅうるも
うるうくはさあようくを絡あすんへりしとひへど。

[illegible]

いつしかとまちおはするに、かくたどたどしくてかへりきたれば、すさまじく、なかなかなりとおぼすことさまざまにて、人のかくしすへたるにやあらんと、わが御心のおもひよらぬくまなく、おとしをき給へりしならひに[illegible]

源氏物語抄出有奥入水原抄以来連篇累牘豈只數十家而已哉就中河海鈔花鳥餘情弄花細流孟津等者尤所宜熟翫而必不可不覧者也雖然簡冊繁多而不暇徧觀而盡識焉今也予所撰湖月鈔欲約其巻編以便于學者因茲勘其出處則取諸河海花鳥考其文意則取諸弄花細流孟津刪其重復摘其精要抜萃而雜記其餘有疑義者更閲諸抄述師

說間亦一二管見隨其處而附嗚呼門人小子見此物語者源丞相所謂君臣之交仁義之道風雅之媒菩提之緣因此鈔而有知之則庶幾教學之一助云尒

延寶元年冬至月　北村氏季吟

書林　林和泉
村上勘兵衛
吉田四郎右衛門
村上勘左衛門